

コミュニケーション教育における教育効果の検証方法

久田 旭彦

(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)

1. はじめに

社会の様々な場面でコミュニケーション能力の重要性が注目されるようになってきたことを受け、教育機関においても、コミュニケーション教育の取り組みが広がりつつある。従来の教育と同様、こうした新しい取り組みについても、客観的なデータにもとづく授業改善と社会への成果報告は重要な課題であり、その為には、適切な方法で教育効果を評価し、検証する必要がある。

コミュニケーション能力のように試験で点数をつけることが難しい能力を評価する場合、代表的な方法として、5段階評価のアンケート調査が行われる。これは、授業目標に沿った様々な項目に対して授業がどの程度役立ったかを、学生自身に評価してもらい、平均点から授業の教育効果を評価するという方法である。しかし多くの場合、平均点は授業内容に関わらず4点前後の同じような値となり、その差から情報を読み取ることは難しい。そこで今回、より明確な情報を得る為の新しい方法を考案し、徳島大学総合科学部の大学1年生を対象とした「基礎ゼミナール」において実施した。その結果と考察について報告する。

2. アンケート評価のゼロ点補正

5段階評価から明確な情報を得られない原因は、その点数の中に、授業についての評価だけでなく、学生一人一人の点数づけの特徴が含まれてしまうことにある。例えば、学生によって常に点数を高めにつける者もいれば、低めにつける者もあり、こうした学生ごとの特徴はノイズとなり、純粋な評価を覆い隠してしまう。正しく評価する為には、このノイズを取り除かなければならないが、実際の授業では学生の出席状況等によって全体の傾向は変化し続ける為、あとからノイズだけを見分けることは困難である。

そこで提案するのが、授業の最後に、授業前と授業後の自己評価を書かせて、その差の絶対値を点数とする方法である。自己評価の変化は、学生が授業から受けた影響の大きさを表し、さらに、同じ学生がつけた評価の差をとることで、ノイズとなる点数づけの特徴を相殺することができる。なお、この際、授業後の自己評価が授業前の自己評価よりも低くなる場合がある。これは能力が下がったという意味ではなく、むしろ評価の基準が上がり、相対的に自己評価が下がったとみるべきである。そこで、自己評価の変化を全てプラスの効果として計算する為、差の絶対値をとることにした。こうして得られた点数を受講生全員について足し合わせることで、教育効果の評価とした。

3. 調査の概要

今回の調査は、「基礎ゼミナール」受講生15名を対象に行った。この授業では、受講生を4名ずつの班に分け、一人一人に、リーダー、発表者、広報担当、資料管理といった役割を持たせた上で、科学をテーマにした学外発表を企画・実施させた。毎回、発表の作り方やグループディスカッションなど、コミュニケーションに関する授業を行い、授業の最後に授業前後の自己評価をつけさせた。さらに最終講義では、「この講義がどの程度役に立ったか」という従来の方法によるアンケートも実施し、新しい方法による結果と比較した。調査は、授業に関連する9項目について行った。

4. 従来の方法との比較

従来の方法による評価を図1に、新しい方法による評価を図2に示す。図1を見ると、準備への意識、姿勢・表情への意識、コミュニケーション能力の評価が4.7点以上とやや高くなっており、一方、論理性とリーダーシップの評価は約3.7点

で低いことが分かった。一方、図2を見ると、図1で評価が高かった3項目の中でも特に準備への意識の評価が高いことが分かり、次いで、残りの2項目と、企画力の評価も高いことが分かった。一方、図1で評価が低かった項目を見ると、図2では同じ傾向がよりはっきりと確認できた。安全への意識、フォロワーシップ、プレゼンテーション能力の評価は同程度であることも分かった。このように、新しい方法では項目ごとの教育効果の差がより顕著に表れ、評価の高い項目と改善すべき項目を見分けやすくなることが確認できた。

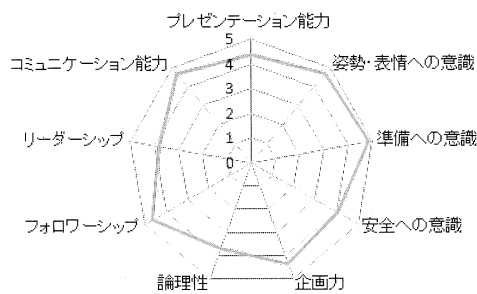


図1 従来の方法による評価

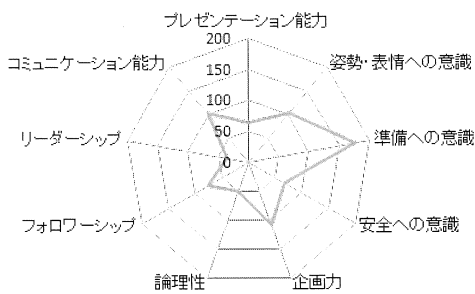


図2 ゼロ点補正したデータによる評価

5. 授業方法による教育効果の検証

今回の調査では、各回の授業の評価をそれまでの評価に足し続けていくことで、授業方法が教育効果に与える影響についても追跡した。例として、役割分担が教育効果に与える影響を紹介する。図3と図4にリーダーシップとプレゼンテーション能力の評価の変化を示す。図3を見ると、第6回以降、リーダーとその他の学生とでリーダーシップの教育効果に大きな差が表れていることが分

かる。第6回は役割分担を決めた回であり、このことから、リーダーを務めることで、通常以上のリーダーシップの成長が期待できるということが、数値として示された。一方、プレゼンテーション能力に関しては、第5回までの評価が低かった学生を優先して発表者に指名したところ、第12回と第16回で評価の大幅な上昇が見られ、最終的には他の学生と同程度の結果が得られた。第12回と第16回は学内発表と学外発表の回であり、このことから、実際に発表することでプレゼンテーション能力が大きく向上することが確認できた。以上の結果から、役割分担の決め方によって授業全体の教育効果を調整できることが確認できた。

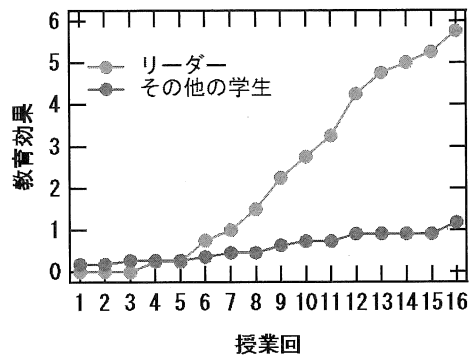


図3 リーダーシップの評価の変化

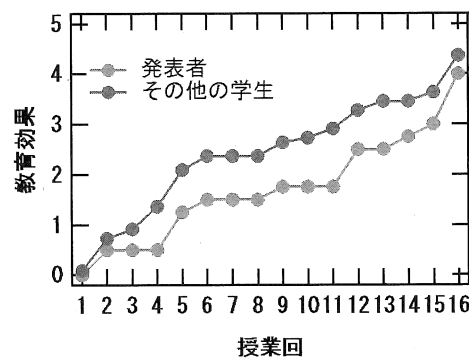


図4 プレゼンテーション能力の評価の変化

6. まとめ

コミュニケーション能力という言葉には様々な能力が含まれており、教員の指導方法によって伸ばせる能力も異なる。今回の方法は、指導方法による教育効果の違いを見分けるうえで有効であり、それぞれの教員の指導方法の特長を見つけ、互いの情報を共有することが、コミュニケーション教育の改善に役立つと考えられる。